

# 海鼠喰ふ

森岡 正作

## 能登蟹の

海底を見て来し眼煮凝れり  
柑橘の黄を溢れしむ小六月  
柚子湯の香もて無粋なる体重計  
幼子もひと葉持ち来る落葉焚  
門の錆びたる土蔵石露の花  
新人類の仲間になれず海鼠喰ふ  
蒟蒻の箸を逃るる小晦日

正月となるといつも昨年の能登地震を思い出すことと思うが、遅々として進まぬ復興に、映像を見ているだけの身には心が痛む。(能登蟹の太き足折る年の酒)と詠まれ、(春潮の遠鳴る能登を母郷とす)と詠まれた登四郎先生にとつて、能登は永遠であつた。

登四郎先生が母郷の能登蟹を召されたように、正月となると特別に故郷の食べ物が欲しくなる。私の場合にはハタハタで、年末に注文して家族にも喜ばれているが、何とこの度は全くの不漁で、時化のため漁に出られぬうえに、ハタハタ自体が来ないと言う。辛うじて前年の二倍超の値で味わうことが出来たが、魚屋の方から「注文しなくてえしよ」と言われる始末であつた。不漁は地球温暖化の影響が大きいと言うが、故郷がまた遠くなるようで寂しい。